2024.12.04.
T.Kobayashi

古代の下野（しもつけ）への旅

ことは、5月に栃木市の大神（おおみわ）神社を訪れたことに始まる。
松尾芭蕉が「奥の細道」の旅でわざわざ立ち寄った「室の八嶋（大神神社）」の存在が気になり見に行ってみた。室の八嶋は、源実朝ほか多くの歌人によって詠まれた所であることから、芭蕉の興味の対象になったらしい。また室の八嶋の南側には、下野国庁跡・国分寺・国分尼寺跡があり、付近には無数の古墳もあり、下野の古代の歴史を覗くことができる土地であることがわかった。
帰宅後に地図や歴史本をまさぐりながら調べて見たら、色々なことが見えてきた。
利根川の支流である思川、思川の支流である姿川と黒川、これらの川の流れに挟まれた所に、古代の人々の暮らしがあったことがわかり、どうしても行ってみたくなってきた。

<1>　摩利支天塚古墳と琵琶塚古墳

11月上旬の晴れた日、古代の下野を目指して車で出発。国道16号線を北上して、野田から流山街道をさらに北上して利根川と江戸川に挟まれた細い隙間のような関宿へ。
利根川を渡って境・結城を経て小山へ出た。
東北本線の小山駅から、線路と並行して走る県道265号線を北上する。喜沢分岐で左俣の県道18号線に入ると、小山ゴルフクラブの中を突っ切るようになる。ゴルフ場を抜けてしばらく走り扶桑歩道橋を過ぎると姿川を渡り、姿川と思川の合流地点のやや北部に出る。
壬生方面に進路をとると、二本の川の中間点を北上するようになる。左手には殺風景な、何もない荒れ地のような広がりがあるが、このあたりが飯塚古墳群跡だろうか。古墳群の北端あたりから道路沿いに集落が並ぶが、ただひたすら集落があるだけで、小さなお店すらひとつもない。
飯塚の集落の中央部あたりで右折すると、道の左右に鬱蒼と茂った林が現れた。
右側の林を目指して入って行くと、「摩利支天尊」と刻まれた石柱と鳥居が建つ小さな草原に出た。
草原の脇に立つ看板には摩利支天塚古墳と書いてある。手頃な場所に車を停めて散策を開始。
鳥居を潜って北進すると小山に登っていく石段が現れた。
40段か50段ぐらいを登ると前方の頭頂部（海抜　49m）になり、墳丘を抜けると後円への登りが始まり、海抜　52mの頂点に立つことが出来る。頂点には摩利支天を祀る立派な堂宇が建っていた。前方後円墳の形をしているが、前方部が台形になっているのが特徴。
発掘当時は、墳丘部に円筒型の埴輪が並んでいたという。古墳の築造時代は5世紀末から6世紀初頭と考えられ、古墳の形状や埴輪の存在から見て、被葬者は大和朝廷の支配下で下毛野國を統括した大首長と考えられるとのこと。
古墳を一周して、柔らかな曲線を描く横からの眺めも楽しんだあと琵琶塚古墳に向かった。
農地の広がりの中に建つ琵琶塚古墳は、樹林がないので探さなくても勝手に視界に入ってくる。
墳丘長　124.8mで摩利支天塚古墳（120.5m）よりも僅かに大きい。築造時期は6世紀前半と想定されている。発掘時に墳丘部に並んでいた埴輪は1000体に及び、被葬者は摩利支天塚よりやや後で登場した、それ以上の格の人だったのではないかと、説明板に記されていた。

<2>　国分寺跡と国分尼寺跡

下野への二度目の旅は、11月下旬のやや温かめな日、今度は東北自動車道経由で栃木市に入って

みた。栃木 IC から県道32号線を東進、惣社町を過ぎると思川と姿川に挟まれた、小さな起伏がある舌状台地になる。国分寺という集落を南に入ると程なくして「しもつけ風土記の丘」という広大な平原のような所へ飛び出した。
海抜 45m前後の平原の中央部に「しもつけ風土記の丘資料館」が建ち、その東側 120mほどの所に「下野国分尼寺跡」があり、西側 600mほどの所に「下野国分寺跡」がある。聖武天皇の勅により国分寺・国分尼寺が全国60カ所余に造られたのは天平13年（711年）。
資料館を見学した後で国分寺跡の見学。南向きに建てられた国分寺の大きさと形を感じながら、東西に南北に歩き回って見た。敷地は、東西 413m・南北 457mあり、どこをどう歩けば良いか悩むような無一物の空間だけが残っている。
寺の南西の端にこんもりと盛上がった甲塚古墳がある。築造時期は6世紀後半帆立貝型と言われるやや寸詰まりな前方後円墳。これまでに多数の土器や埴輪が発掘されているが、全体の発掘はされていないので、内容としてはまだ未知数に近いらしい。この古墳は二寺と同様に真南を向いている。
墳墓の上は草木が生え放題になっていて登ってみることはできなかった。
残念なことに、甲塚古墳の隣にはいかがわしいホテルが建ち、しかも廃業してしまったようで、けばけばしい廃屋だけが残り、周囲の景色に似つかわしくない状態になっていた。地形図を見たら、県道の際にある三角点は海抜 49.2mとなっていた。甲塚古墳の頂点は約 55mと考えられる。
次は西に向かって歩き、国分尼寺跡へ。国分寺よりひとまわり狭いが、同じように南を向いて建っており、礎石の跡を感じさせるものも一部残っているようだった。尼寺が別に存在して、しかもひとまわり小さいということは、今風に言えば「男尊女卑」が背景にあったのかな、と思いを巡らせながら戻った。

<3>　丸塚古墳と愛宕塚古墳
資料館と国分尼寺跡の間の道を北に抜けて県道44号線に出ると、「丸塚古墳」を示す案内標識があったので、さらに北進を続けた。西側の畑と荒れ地の間のような所に丸塚古墳があった。
畑の中央部にある盛り上がりは目立つので見つけやすい。道端に駐車して丸塚見学。
7世紀始め頃に築造されたと見られており、周溝を含めた直径85mで、円墳としては栃木県最大と言われている。玄室の位置から見ると、この古墳も南を向いて築造されている。
県道に戻って西へ走るとまもなく右手に愛宕神社が目に入った。神社の鳥居の横に建つ石柱には
愛宕塚古墳と書いてある。鳥居を潜ると緩やかな登りになり、愛宕神社の本殿が現れた。
本殿の後に柔和な曲線の丘が感じられるので行って見たら、前方後円墳の墳丘上に小さな祠が建ち手前側にある本殿とを結ぶように小さな石段が設けてあった。登ってみたが樹林の中で眺望は得られなかった。この古墳は6世紀終り頃の築造と言われており、周溝を含めた全長は101m、西南西に向いている。鬱蒼と茂った林の中にあるので古墳の存在に気がつかないで通り過ぎてしまう人もいるかもしれない。
ここからさらに北へ進むと、甲山・吾妻山などいくつか古墳を見ることができる筈だが、本日はここまでとして、次の目的地の下野国庁跡へと向かうことにした

<4>　下野国庁跡
県道を西へ走ると少しばかり下り道になり、思川を渡ると海抜 48mの田畑の広がりになった。田畑は東西南北に整然と区画されており、古代からの「何か」を感じる。
県道の標識を頼りに南へ折れると、大房地（だいぼうち）という集落の南側に下野国庁跡資料館がある。資料館の南側に広がる平地が「下野国庁跡」。

資料館を見学した後で敷地内を歩き回ってみた。国庁も建物は南向きに建ち、東西95m・南北95mの敷地で板塀に囲まれていたらしい。発掘された物から、社殿の工法などが明らかになり、それを元にして復元した前殿が広い敷地の中に建っていた。
南には、関東の平野が広がり、東側を望めば、思川を挟んで対岸の台地に国分寺の塔が望めたに違いない。そんな景色を想像してみただけでも楽しくなってくる。

<5>　下野薬師寺
東に向かって思川を渡り、姿川を渡り、国道4号線を北進。自治医大前駅の先で東北本線の東側に抜けてしばらく進むと下野薬師寺がある。
白鳳8年（680年）建立と言われている。天武天皇が、皇后（後の持統天皇）の病気にあたり薬師瑠璃光如来の御威徳を願って建立したとの言い伝えが残っており、この地を選び、伽藍の配置等を進言したのは祚蓮上人と言われている。
天平宝字5年（761年）に鑑真和上により戒壇院が建てられた。日本三戒壇のひとつに数えられて、東国の仏教文化の隆盛に大きく貢献した。宝亀元年（777年）に道鏡がこの寺の別当として赴任して、この地に長く住んだ。
暦応2年（1339年）、足利尊氏が各国に安国寺を建てるにあたり、下野については薬師寺があることから新しく寺を建てることなく、この寺を安国寺と改称した。
元亀元年（1570年）、小田原の北条氏政親子が下妻の多賀谷氏の城に攻め入った時、結城の援軍に攻められて安国寺に退却した。大風雪に見舞われて、飢えと寒さにたまらず民家に火を着けて暖をとったところ寺に火が燃え移り、全ての建物が焼失した。
平成29年になって、一部の建物の再建を果たしたのを機会に、寺の名を元の「下野薬師寺」に戻した。
晩秋の日の傾きは速いので、薬師寺拝観をもって本日の「古代の下野への旅」の幕を引き、国道4号線を南に走り、家路についた。

<右列>
上：摩利支天塚古墳
中：下野国分寺跡
下：下野国分尼寺跡

<中列）
上：琵琶塚古墳
中：甲塚古墳
下：丸塚古墳

<左列>
上：愛宕塚古墳
中：下野国庁跡
下：下野薬師寺

以上

●関連情報　　室の八嶋探訪の旅　　http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/oomiwa.pdf